

発達障害におけるエピジェネティクス: ADHD および内部表現型。

[アーチャー T¹](#)、[オスカーバーマン M](#)、[ブルーム K](#)。

著者情報

1

ヨーテボリ大学心理学部、Box 500、SE-40530 ヨーテボリ、スウェーデン。

概要

遺伝的および環境的要因の複雑なインタラクティブな操作を伴う注意欠陥/多動性障害 (ADHD) の不均一性は、さまざまな障害の発現で表されます: 重症度、症状の併存疾患、表現型に対する遺伝子の影響。ゲノム刷り込みの神経発達の影響は、ADHD の認知、情動、および病態生理学的ドメインを調節する構造生理学的変動の段階を設定しています。遺伝的および環境的要因の相対的な寄与は、構造的および機能的の両方で、状態の発達の軌跡に対する急速に増殖する洞察を提供します。起源の影響は、疾病プロセスのデビューの遺伝的リスクがしばしば社会環境、すなわち乳幼児の親環境と相互作用するという概念を支持しているようです。障害の根底にある責任のマーカーである内表現型の概念は、複雑な臨床障害に関連する遺伝的リスクの検出を促進する可能性があります。単純な遺伝的関連は、ADHD のスペクトルを説明するには不十分であることが証明されています。主要な分析レベルでは、脳内シグナル伝達機構、ドーパミン、セロトニン、ノルアドレナリンのエピジェネティックな調節の検討が検討されています。神経系、生存、および脳システムの機能維持に関与する神経栄養因子は、脳障害の根底にある神経可塑性の変化に関与しており、ADHD の遺伝的素因に関与しているが、明らかにではなく、単純な方法でも単純な方法でも関与していない。介入の文脈では、ADHD の薬理的介入の遺伝的連鎖研究は、関連性が障害の診断ではなく、「薬物反応の表現型」に適合していることを実証しています。障害診断と、神経伝達物質および脳由来神経栄養因子 (BDNF) の構造と機能を調節する遺伝子との間の遺伝的関連の有無に関する矛盾する証拠にもかかわらず、症状プロファイルの内表現型と一塩基多型との関連は安心しているようです。

PMID:

[22224195](#)

PMCID:

[PMC3250517](#)

DOI:

10.4172/2157-7412.1000104

無料の PMC 記事